

新生

東京都

将来世代へ遺すメッセージ

同人誌『新生』を発行している新生の会は由緒ある同人誌のグループとは異なり、今や極少の会員で成り立っている。会の生い立ちを説明するには、創立以前の経緯を語らなければならない。

一九九八年介護ボランティアをしていた印刷会社の社長が老人ホームで老齢難病者の現役時代を綴った原稿が眠っているのを知り、是非本にしてあげたいとの動機から端を発し自分史を作る自費出版を始めた。自費出版友の会「下



苦勞をされ、剩^{あまつ}ず財政的な支援もされた様である。発足時役職を担ったのは副会長中尾幸造（現会長）、会計大崎健吉（故人）、会計幹事庭野隆雄（退会）の諸氏である。深津氏は顧問に就任し、何くれとなく運営の調整を図られた。弊誌名『新生』の名付け親でもあり、投稿常連者でもあった。共に編集に携わった誼^{よしみ}で筆者を新生の会の創立時に会に引き入れた。

いまして紹介すると、佐藤氏はパイオニアの会社で社史編纂を担われた。中尾氏は発足時より会長の脇を支え苦勞を共にしてきた。『新生』第十六号完成を以て筆者のあと第三代目の会長に就任した。テイラー師匠を生業としつつ文献を閲し執筆する素人離れの技量は異色の存在だ。大崎氏は数学教師歴を持つ豪傑肌の登山家で編集をも担当された。山中遭遇した熊と格闘し重傷を負い、恐らくその武勇伝が遠因で亡くなられた。庭野氏は投稿常連者で独特なお遍路紀行文や国の会計問題を主に論じておられた。

『新生』の表紙の題字は長年小学校の校長を勤められた石井和子氏（故人）の揮毫である。

当初の会員二十二名のうち初志を果たせぬ退会者が続き、会員は半減、現在九名のうち創立会員は五名に減り勢い初期の熱気は冷め加減、新人投稿者に待望する処大である。

新人会員の力量で次の時代に向け、体質は徐々に変化の兆しあり。会員減少の原因は高齢化である。八十歳代六名

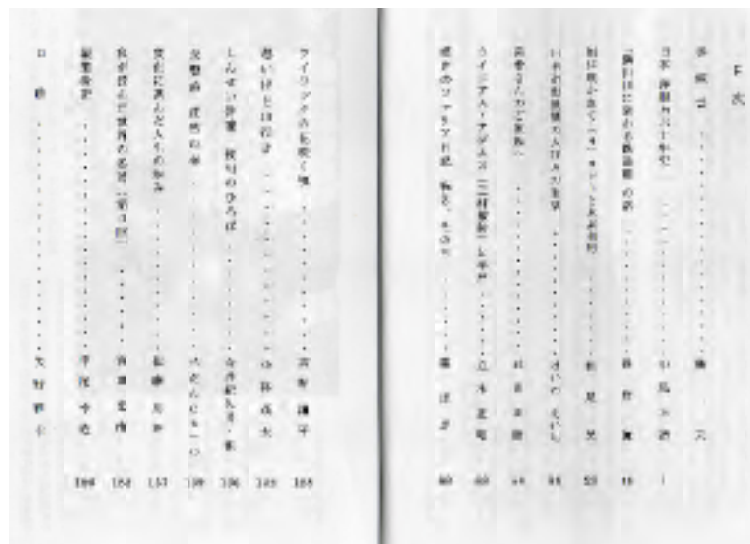
田会」である。

二〇〇一年朝日新聞に折り込みの「定年時代」で、自分史ブームに乗って定年を迎えた世代、業種多彩な約八〇人の執筆を応援すべく下田会は三カ月に一回開催され、その会合はさながら異業種交流の場ともなるユニークな活動であると紹介された。将来世代へ遺すメッセージとして己が歩んだ道を執筆するための手解きを授けた。六年後の登録会員数は二四〇名、書籍化された作品は百五十一点と記録に残る。後年主宰者の不祥事で下田会は会員の決議で終局を迎えた。それ以前に退会していた筆者は詳細を承知していない。だが聞く処、少なからぬ会員が出版を反故にされ支払代金を踏み倒された由だ。

下田会の同人誌「皆楽」の編集委員を務めた緒緯から虎の子許取は論外だが、想うに下田会はそれなりに有意義な活動であつた。編集委員は四、五名だったが、記憶では定例会の司会役深津泰藏氏（故人）に現役時代社内誌編集に携つた山野繁氏と三人の持回りで校正を担当した。

下田会の解散で創作熱意の捌け口を失った十名ほどが新しい発表の場を求め二〇一四年に「新生の会」を起ち上げた。来年で十年目の節目を迎える事になる。結成への中核として運動された深津氏は佐藤忠正氏を会長に担ぎ出し、佐藤氏は以降五年間会長として会の基礎を築かれた。当初印刷・製本等に精通している者はなく、会長は並々ならぬ

と高齢化は否いなみようがない。若年層不在は不活性の原因だと認識はしている。だが、最早手に汗を握るような熱血小説などは期待できなくとも、見方を変えれば、長い人生経験に照らし得られた知見を執筆に反映できる利点があるというものだ。他人が手を付けない、付けたがらない端境期の問題でも綿密に考証を加えたり、時事問題を深く考察し



「新生」15号目次

たりと、文芸とはニュアンスの異なる分野での問題提起もウエルカムと、視線を転じ海外情報や体験記をも含めジャンルの間口は広がりつつあり、誌面に若さと知的な香りも求めたい。

発足時、既に高齢者集団で集まりが悪く、且つ慣れない運営も加わり、熱の籠った批評座談の機会を逸し、今や少数の利点、合評等のスキルアップはコロナも加わり夢の夢。問われれば非常に異質な同人誌集団と申せましょう。会誌の紹介が疎かになったが、『新生』は偏に執筆意欲ある人たちに投稿の場を設けることに尽きる。

年二回の発行で百八十〜二百頁を毎号百部刷り、定価は八百円、販路なし。製本方法は提出原稿を複写し製本する至極プリミチブな手法に頼っている。全員が必ずしもパソコンを操作できないためである。会員は年会費二千円。掲載料はA5原稿一枚三百五十円、原稿の書式は、余白以外は自由、故に縦書き横書き作品が混在し不統一感はある。編集者の意向に反し、投稿者の主義に従う限り読者に不評であつても敢えて混在は続く。抱える課題多しだ。

今般、当会員松尾晃氏の「風に吹かれて(4) ヨットと水素利用」が御誌の推薦作に選ばれ新生の会として誇らしく、今後の活動に大いなる励みになった。更なるご鞭撻をお願いする次第だ。

(文責／篤一夫)



●「全国同人雑誌評」より

「新生」は知識雑誌の風体がある。その内容は高度な知見を多く含み、学ぶことが多い。巻頭言での篤一夫氏の論評も、朝日新聞などメジャー紙の論説文よりもレベルが高い。見るべきこと、言うべきことを確固と打ち出している。稀有な、珍重すべき同人誌である。

新生の会

〒206・0803

東京都稲城市向陽台四・二 C 710

篤一夫方

TEL 042・377・5860